# マクベス

ラガーマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
マクベス

【Ｎコード】
Ｎ０４３４Ｆ

【作者名】
ラガーマン

【あらすじ】
２０６０年世界政府は相次ぐテロに対抗するため、対テロ組織［メシア］を結成した、これは人間としての感情を無くしたＳランクエージェントであるマクベスがとある少女と出会い人間としての感情を取り戻していく恋愛物語である。

## 第1話：マクベスは出会った（前書き）

初作品です、ヒロインの東条　楓は一応「いちご１００％」の東城　綾を意識して作ってみました。
趣味で作ったものですが楽しんでくれたら嬉しいです。

## 第1話：マクベスは出会った

２０５０年　世界はテロの巣窟と化していた…、世界中あらゆるところでテロ組織が結成し、テロが日常茶飯事となる時代を向かえていた

２０５５年　世界政府通称［ＷＧ］はこの対策として対テロ組織［メシア］を結成したことを全世界に宣言、しかし組織の本拠地、人数構成、組織図などの情報は一切公表されず、知っているのはＷＧの代表数名だけであった…

２０６０年４月
鳳凰学園高等部２ーＡ

（ざわついている教室）
「静かにしろー、今日からウチのクラスに入る転入生を紹介するぞ～、じゃあとりあえず自己紹介してくれ」
「両親の都合で転入しました鉄（くろがね）　雅人（まさと）です、よろしくお願いします」
パチパチパチパチ
（拍手が起こる）
「じゃあ君の席は２列目の一番後ろに座ってくれ」
「はい…」
鉄　雅人…実際にはそんな人物は存在しない…俺の本当の名前は［マクベス］メシアのエージェントだ
何故エージェントが学園生活を送っているのか…、これは一般人と

同じ生活をする事でエージェントであることを隠し、情報の流出を防ぐ為である。

とりあえず指定された席に座った、すると隣から声がかかった。
「あ、あの…」
聞こえるか聞こえないかの小さな声だった。
俺が隣を向くと、黒の長髪でメガネを掛けた女子が座っていた、とても清楚な感じで小動物という言葉が似合う感じの女子だった。
「あの…隣の席の東条　楓です……あの…よろしく…」
「よろしく…」
俺が答えると東条は恥ずかしそうに前を向いた。
正直無視しても良かった、只の飾りでしかないこの学園生活に友情や恋愛など必要ないと思っていた。
だがこれが全ての始まりだったとは知る由もなかった…

## 第2話：マクベスは考える（前書き）

ちょっと慣れてきたので文章とかはマシになってると思います、若干説明が多いですが読んでみてください

## 第2話：マクベスは考える

転入してから一週間…俺は誰とも話さなかった、
「所詮飾りの学園生活だ」ど自分に言い聞かせて他人の話を悉く無視していのだ…。

翌日、その日はずっと雨が降っていた…、家に帰ろうと帰宅路を歩いていると、少女が男3人に囲まれていた、
「なぁなぁどっか遊びにいこーよ」
「君学生？可愛いじゃん」
「いいとこ連れてってあげるからさ」
「あの…その…困ります…」男達（明らかチンピラ）の誘いに対し少女は小さな声で嫌がった
だが
「いいじゃん行こ行こ」とチンピラは少女の腕を強引に掴んで連れていこうとした
「や、やめて下さい…離して下さい！」
少女は必死に抵抗したが男達の力には全くかなわい。
「そんな事言わないでさぁ行こうよ」
「嫌です！、離して下さい！」

「……」
よく見るとその少女は隣の席の東条だった。
初めは無視しようかと思った、自分には関係ないとも思った、だけど何故こんな事を思ったのか俺は分からない…俺は不思議と東条を助けようと思った…。

「やめろ……」
と、俺はチンピラ達の腕を弾き東条を解放した。
「！」
「くろ…がね…君？」
「離れとけ…」
そう言って東条を自分の後ろに匿うと

「いってぇ！、何すんだてめぇ！」
と、一人が殴りかかってきた、たが
「遅い…」
バキッゴキッボコッ
と、相手のパンチが当たる前に2～3発お見舞いすると男は呆気なく気絶した

「てめぇ…調子のんなよ！」と、もう一人がポケットから小型のナイフを取り出し
「死ねェ！」
と、切りかかりに来たが、それを受け止め急所へ一発見舞ってやったキーーーン
男子特有の痛みが走ったのか白目を向いて男は気絶した。

「さてと、後はお前だけだな…」
「ひっ、ヒィッ！」と男は腰を抜かして逃げようとした。
「こないのか？…だったら失せろ…」
と言うと男は一目散に逃げていった。

「あの…」
振り返ると東条がいた。

「あ、ありがとうございました…その…とても助かりました…」
「別に、ただ目障りだったから片付けただけだ…」
と言って帰ろうとすると
「あ…待って！」
突然呼び止められ振り向くと東条が
「手…怪我してる…」
「あぁ、さっきのナイフで切れたか…チッ不覚だ…」
手からは真っ赤な血が流れでていた。
「ごめんなさい…私のせいでこうなって…」
「別にお前のせいじゃない…気にするな」
「でも…せめてコレだけもさせて…」
と、東条はハンカチで俺の手を巻いてくれた。
「ハンカチ…返さなくていいから…本当にありがとう…じゃあね…」
と言って走り去ってしまった…
「……」

俺はその場に立ち尽くして自分に問いかけていた…何故俺は彼女を助けたのか…何故こんなにも怪我した手を暖かく感じるのか…。
「分からない…なんなんだこの感じは…」
その問いに答えれないまま、家に帰宅した…。

帰宅すると、通信が入っていた。
「ミッションか…」
そう思い地下室へ移動した。

マクベスの家及びに大抵のエージェントの家は地下にそういった施設（訓練場、通信施設、武器庫など）を置いてあり、そこから出撃などを行う。

通信機器のスイッチを入れると声が聞こえてき画面上に中高年の軍服を着た人があらわれた

「……せよ、…答せよマクベス、応答せよマクベス」

「聞こえてるよ、大佐」

「マクベスか、どうやら学校帰りのようで申し訳ないが…」

彼の名前はマゾロフ大佐メシアの作戦指令官を務めておりエージェントはみな彼からミッションのブリーフィング（内容説明）を受ける

「ミッションだろ、

分かってるよ、あんたはそれ以外で通信なんかしてこないだろ」

「分かっていたか…なら話は早い、実は中東でまたテロ組織

「ヘヴンズ」が活動を再開した、今回はその鎮圧及び駆逐をしてほしい」

「俺一人か？」

「いや、既にバルトがアフガニスタンに向かっている、現地で合流してほしい」

「了解…すぐに向かう」

武器庫を装備を整え、俺はＷＣＲＴに乗った。ＷＣＲＴ（ワールド・コネクト・リニア・トレイン）とはメシアが設立した超高速リニアモーターの事で、世界中の主要都市の地下に繋がっておりこれを使う事で日本からブラジルまでも１時間以内に移動する事ができる

アフガニスタンに到着するとバルトが待っていた

バルトは金色の長髪のイギリス人であり、俺と同じくＳランクエージェントの一人である。

「ようマクベスよく来たな」

「ミッションだから仕方ないだろ」
「まぁそれもそうか」
「戦況はどうなっている？」
「五分五分ってとこかな、
「ヘヴンズ」のやつら装甲機兵（アーマード）を何処からか手に入れたらしい、おかげでBランクは負傷者多数、Aランクも苦戦しているかな」
「なる程、だから俺らが呼び出されたわけか…」
「まぁサッサと片付けようぜ」
「ああ、当然だ」

そして俺達は戦場へ繰り出した、しかしもうその時には先ほどの疑問など頭から忘れていた……

## マクベスは学ぶ（前書き）

映研に宮田　中村　里中…勘のいい人なら絶対に気づくと思います、結構設定を盗んで書いてる所が多いですが…一応自分オリジナルもあるので読んでみてください。

## マクベスは学ぶ

あの日からまた一週間たった、
いつもと変わらない日々…昼間は学校へ行き、夜は戦場へ行くという変わり映えのない日常が続いていた。
だけど一つだけ変わった事があった。それは
「鉄君…おはよう」あの日以来東条が話しかけて来るようになった、話しかけるといっても
「おはよう」や
「バイバイ」みたいな挨拶程度だけでそれ以上は何も喋らなかった
俺は初めのうちは無視していたが毎日話しかけてくるので俺も
「おはよう」と返すようになった

ある日の放課後、俺は帰ろうと教室を出ると。
「あの…鉄君」
ふと振り返ると東条がいた。
「今日…今からちょっといいかな…ちょっと話があるんだけど…」
「あの…鉄君って映画に興味ある？」
「映画？」
「うん…実はね私達今度映画研究部って作ることにしたの」
「それで…あの…その鉄君もよかったら入らないかな…と思って」
もちろん映画などあまり見たこともない、一般教養訓練で2～3本見ただけだった。
正直嫌だった、
「偽りの学園生活だから」と思った
だがふとバルトが言っていた事を思い出した…

「マクベス学園生活はどうだ？」
「別に、ただ授業を受けて生徒を演じてるだけだ。」
「部活には入らないのか？」
「部活？なんだそれは。」「そっか…お前はそういう一般常識が抜けてるんだったな…。」
「部活っていうのはな放課後に人と共にスポーツをしたり、自分の趣味を行う事で人とのコミュニティーを深める活動の事を言うんだ。」
「コミュニティー？なんでそんなものを深めなければならないんだ、無駄な時間としか思えないが。」
「そうでもないぞ、コミュニティーを築き上げる事で自分に足りないものを吸収出来たりもする、特にお前はただでさえ一般常識が少ないんだから参加すべきなんだよ。」
「…そうなのか。」
「まぁ少なくともやっていて損は無いと思うぞ、いい兵士になるにはな。」

「それは部活という事になるのか？」
俺は東条に聞いた。
「え？…あ、うんでも部活というよりは同好会という事になるけれど…いや…かな？」
「いや参加する。」
「よかったぁ…これで人数が足りる…ありがとう鉄君！」
よほど映画が好きなんだろうか、その時の東条の笑顔は小さな子供のように無邪気で可愛かった。
「じゃあ詳しい事はまた追って伝えるね」
そういうと東条は走っていった…。

数日後…俺は東条に呼び出されて視聴覚室へ行った。
「あっ鉄君」
そこには東条と男子が3人いた。
一番左の男は大柄で威勢の良さそうな男子だった。
真ん中の男はやや小柄で（失礼だが）オタクだとすぐに分かった。
一番右の男はなんの特徴もないただの一般生徒のような男だった。
「あっ紹介するね、一緒に映研に参加してくれる宮田君　中村君
里中君。
こっちは新しく入ってくれる鉄君。」
「宮田です！よろしく！」　「中村っていいます、以後よろしくw」
「里中です、一緒に楽しい映画作ろうな。」
「鉄です…よろしく」

「ところで映研は一体どんな活動をするんだ？」
俺は里中に聞いてみた。
「あ、まだ言ってなかったけ？映画を作るんだよ俺達で脚本は東条
で監督は俺、宮田はアシスタントで中村が編集。一応機材は揃って
るんだけど……」
「どうした？金でも無いのか？」
「いやそうじゃなくて、その…まだヒロインが見つかってないんだ
…」
「そうなんだよねーw俺は楓ちゃんでいいと思うんだけどねーw。」
「俺も楓ちゃんがいいと思うぞ！」
すると東条は
「わっ！私になんか…絶対出来ないよ…」
と、恥ずかしそうに言った。
「だからまだヒロイン募集中なんだ…鉄誰か適役な子知らないか？」
「俺は知らない…転校して来たばかりだからな。まだあまり面識が

ない」
「そっか…東条、やっぱり無理かな？」
「ごめんなさい…私はちょっと…」
「う～ん参ったな…じゃあ６組の…」
その後もヒロイン探しで会議は続いたが結局きまらず、里中の号令で解散となった。

「あの…鉄君」
俺が帰ろうとすると、東条が呼び止めた。
「これ…一応私が書いた脚本なんだ、また…読んで感想聞かせてね…その…下手くそで恥ずかしいけど…。」
「分かった」
「あと…ありがとね、こんな同好会でも入ってくれて…。」
「別に…構わない。」
「本当にありがとう…じゃあ…またね。」
「ああ、また明日」

そういって俺は帰路についた…。

## マクベスは伝える（前書き）

一応展開を強めてみました、若干「あれ？おかしいな」とか思う所があるかも知れませんが頑張って書いたので読んで下さい

## マクベスは伝える

俺が映研に入部して3週間…。
未だにヒロインが見つからないため俺達は撮影を開始出来ないでいた…。
「3組みの久美子ちゃんも無理か～一体どうするよ監督w」
「う～ん…まいったなぁ…、この学園でこの役が出来そうなのはもう他にいないからな…」
「他校の女の子はどうだ！桃坂高校なんて可愛い子が多いぞ！」
「宮田…お前昨日も言ってたぞ…」
「他校の子は無理だなー、コネがないしそんな子まずいないだろw」
「せめて9月の鳳凰祭(ほうおうさい)にはまにあせたいからもうそろそろ撮影を始めないとヤバいな…夏休みでないとロケも出来ないし…」

こんなかんじの会議を毎日繰り返しているだけだった…

「やっぱり…東条に頼むしかないのかな…」
と里中はつぶやいた。
「それはムリだろ～東条ちゃんこういうの全く出来なさそうだしw」
「だから桃坂の子を…」
「宮田…しつこいぞ」
「あ～あどうするかな…　ってもう6時か…じゃあ今日は解散！」
結局今日もヒロインは決まらず里中の号令で解散となった…

帰り道ー俺の家は学園から近く、学園の近くにある涼風(すずかぜ)公園を通り抜ければすぐの所にあり歩いて10分ほどの距離だった。
だけど俺はいつも涼風公園を通り抜ける時寄り道をして公園にある

展望台に登っていた…その展望台は俺がこの町に来て以来そこから眺める町の夕焼けが気に入ってほぼ毎日通っていた場所だった。

もちろん今日も俺は展望台に登った…大抵今の時間帯には人は殆どおらず俺一人でいることが多かった、だけど今日は一人だけ先客がいた…

「東条…？」その先客は東条だった、だが今までこの場所で東条に会ったことは一度も無かった。「えっ…鉄君？」

「なぜここにいるんだ？」

「鉄君こそ…」

「俺はいつも来ている、ここから眺める夕焼けが好きだからな…」

「私も…この場所が大好きなの、ちっちゃい頃は毎日来てたけど引っ越してからは殆ど来なくなったけど、たまにここに来て夕焼けを眺めるのが好きなの。」

「そうか…」

少しの間二人で町の夕焼けを眺めていた…。

すると東条が。

「私ね…何か迷ったり上手くいかない時にここに来るの…。」「…何かあったのか？」

「うん…今日里中君から［ヒロイン引き受けてくれないか］って頼まれたの、私がヒロインなんて…無理に決まってるのに…。」

「……」

少しの沈黙の後俺は…

「俺も…東条がいいと思う、あの脚本にあうのは東条しかいないと思っている。」

「えっ……む、無理よ私なんか…その…演技も下手だし…地味なだけだし…。」

「それに恥ずかしいし…」東条は慌てて反論した。
だが…

「無理だと何故分かる？」
「えっ…？」
「東条には無理だと思っているなら、俺や里中は薦めたりはしない、お前に可能性があるから薦めているんだ。」
「……」
「お前だって自分の脚本に可能性を信じたから里中と映画を作ろうとしているんだろう？」
「それは…そうだけど…でも…。」
「［自分に1ミリの可能性でもあるのならそれを信じろ、自分の可能性を見捨てるな。］…俺の師匠（せんせい）はそう言っていた。」
「俺はその言葉を信じ続けている。」
「自分の…可能性…。」
「……」

東条は黙っていた…。

「別に絶対にやれと言っているわけではない、ただお前には可能性があるということを覚えておいてほしい…。」
「じゃあまた明日…。」
そう言って俺は展望台を降りていった…

「可能性を…信じる…。」東条は一人展望台で佇んでいた。

次の日の放課後
俺が視聴覚室に行くと…

「［あなたと…一緒にいたい…］……ちょっと違うかな…」
一人台本をよみ練習している東条の姿があった。
「あっ、鉄君。」
「ヒロイン…受けることにしたのか？」

すると東条は恥ずかしそうに。
「う、うん…その…まだ全然下手で恥ずかしいけど…」
「鉄君が自分の可能性を信じる事を教えてくれたから…私…やってみる。」
「そうか…頑張れ」
「うん、あと…その…ありがとう…私に勇気をくれて…。」
「別に構わない、俺は自分が師匠から教わったことをそのまま伝えただけだ…」
「ううん、それでも私に勇気をくれた…本当に…ありがとう」
「……」
この時俺は初めて
「照れる」というのを感じた、何だかむずがゆいものだが悪くは無かった…。
（なるほどな…こういうものなのか…）

「？、どうしたの？」
「いや、なんでもない…」
ガラッ
里中達が入ってきた
「おーっす鉄、東条から話は聞いてるな、じゃあ早速練習に入ろうぜ」
「楓ちゃ～ん！やっぱ楓ちゃんが一番だってずっと思ってたよー！」
「宮田うそつくなよ～桃坂の子がいいって言ってたのお前だろw、まぁとりあえず頑張っていこう～w」
こうして映研の活動が本格的に始まった。

その日の夜
俺はバルトと通信をしていた
＞へぇ～死神の救世主が
「照れる」とはねぇ＜
「組織に漏らしたら殺るぞ。」
＞大丈夫、大丈夫漏らさないって、それにお前最近変わってきてるしな＜
「そうか？いつも体調及び装備は変えていないが…。」
＞違う違う、雰囲気だよお前の、前まで殺意丸出しだったからな＜
「そうか…やはりお前の言ったとおり部活で得られる物もあるものだな。」
＞そうだろ、……だけどなこれだけは忘れるなよ＜
「分かっている、俺らはあくまでエージェントであるということだろう？」
＞そうだ、だから部活の仲間に対して変な感情を起こすんじゃないぞ。＜
「分かっている…切るぞ」
そう、俺達はエージェントなんだ…一般人とは違う…その事を忘れてはいけない…。

## マクベスは脱出する～第一編～（前書き）

久々の戦闘シーンです（ちょっとだけど…）出来る限りリアルにしてみましたので読んでみて下さい。

## マクベスは脱出する～第一編～

「はいカット！今の泣くシーンなかなかよかったよ」
「さすがは楓ちゃ～ん！」
「始めの時よりも良くなっているねw」
「よかった…今の所頑張って練習してたから…」

東条がヒロインを引き受けて早1ヶ月、ヒロイン探しで手間取ったせいもあり撮影は急ピッチで進められた……といきたいのだが他の文化部の使用及び東条の文芸部（掛け持ち）も重なってしまうため作業はなかなか進まなかった。ちなみに話の内容は里中が主人公で東条がヒロインの学園恋愛もの（他の女役はゲスト出演という事で演劇部の部員を拝借）の作品で俺は照明及び役を担当していた。

「はいカット！じゃあ今日はここまでお疲れさん」
「里中ぁミ〇タードーナツ寄ってこうぜw」
「あ、俺も！俺も！」
「お前はどうせ奢ってもらうつもりだろw」
「鉄と東条はどうする？一緒に行く？」
「俺は…やめておく、悪いな」「私も今日はやることがまだあるから…ごめんなさい」
「そっか、じゃあ宮田　中村行こうぜ」
そう言って里中達は足早に教室を出ていった。

特にやることもないので俺も帰る事にした
「じゃあ俺も…またな」
「うん、さようなら」

帰り道
いつものように展望台で夕焼けを眺めてから俺は帰路についた……
だが不覚にもケースを学園に忘れた事を思い出した。
ケースの中身は俺らエージェントが護身用に持っているハンドガン（ベレッタＭ１９３４）だった、正体がバレる危険性を考え、俺は取りに戻ることにした。

２ーＡの教室
俺が教室に入るとまだ東条が机に向かっていた。
「東条？何をしてるんだ？」
「……」
「東条、聞こえてるのか？」
「……」
どうやら小説を書くのに夢中らしい

「東条！」
「はっ！はひぃぃぃ！」俺が大声で叫ぶと慌てて立ち上がった

「く、鉄君！？びっくりした…」
「なにをやっているんだ、もう完全下校ギリギリだぞ。」
俺らの学園では7時を過ぎると完全下校となり、生徒全員校外に出なくてはならない、そして先生達も全員校外に出るため夜の校舎には警備ロボットが数台校内を巡回し侵入者を撃退するようになっている。

「あっ、もうこんな時間なんだ…小説の続き書いてたら夢中になって…鉄君は？」
「俺はただ忘れ物を取りに来ただけだ。」
俺は自分の机に置いてあったケースを取った。

「早く出よう、警備ロボットが動き出したら面倒なことになる。」
「う、うん分かった」
そう言うと東条は慌てて荷物を片づけ始めた、すると突然。

パッ
教室及び廊下など全ての照明が落ち、たちまち校舎は真っ暗になってしまった。

「あ、あれ！？でっ、電気が…」突然の出来事に東条は慌てている
「恐らく…先生が学園のシステムを落としたんだろう」
「で、でもまだ私たちが…」
「確か今日の担当は生物の浜崎だったからな…多分あのハゲが確認を怠ったんだろう」
「そっか…えっと…じゃあ早く警備ロボットで連絡をとらないと…」
「そうだな」

こういう事態に備えて警備ロボットには外部と連絡を取れる通信機がついてあり、生徒証を見せることで使えるようになっている。すると…

ガラッ、ガシャガシャ
と、ドアを開けて警備ロボットが入ってきた、どうやらセンサーで俺達を感知したようだった

「よかった…丁度来てくれたみたい」
そう言って東条は警備ロボに近づいていった。

だがその時俺は何故か警備ロボからおびただしい殺気を感じた…

「おい、東条……」
と、東条を呼び止めようとしたその時
「侵入者ハッケン侵入者ハッケン、警戒レベル8テロリストトハンダン武力ニヨル強制ハイジョを開始シマス、ターゲット一名ロックオン…」
と言ってその両手をガトリングガンに変え銃口を東条に突きつけた
「えっ……」
「東条！！」
俺は東条の元へ走り、抱きしめながら倒れ込んだ
その瞬間
「攻撃カイシ」ダダダダダダダダダダダダダダダダダッ！
警備ロボによる一斉射撃が始まった
俺と東条はかろうじて伏せ直撃は避けたが…
チュン！
「ーーッ！」
俺は倒れ込む時に一発だけ腕にかすらせてしまった。
ダダダダダダダダダダダダダッ！
警備ロボは乱射を続けていたが、一定の角度で銃を構え左右に乱射しているので机の下にいれば弾が当たる可能性はなかった。やがて
ダダダダダダダダダダダダ……
弾切れを起こし警備ロボは撃つのをやめた…
「攻撃シュウリョウ攻撃シュウリョウ、生存確認ヲオコナイマス」

ウィーン

すると警備ロボはセンサーのようなもので辺りを見回して始めた。
「生存確認アリ、ターゲットノホカ一名ノ生存ヲ確認、ターゲットヲ追加シツイゲキヲ開始シマス」

「逃げるぞ！！」
俺は東条の手を引き教室から逃げ出した

「ターゲット逃走ツイセキシマス」

それが俺にとってもっとも長い夜の始まりだった…

## マクベスは脱出する～第二編～（前書き）

ちょっと今までのより長めに出来ていますが飽きずに読んでみてください。

## マクベスは脱出する～第二編～

「……ここまでくれば大丈夫だろう、東条大丈夫か？」
「……」
「東条？」
「だ、大丈夫大丈夫……」
東条は笑顔で言った…が、その笑顔は誰が見ても作り物とわかるほどこわばっていた。

「本当に大丈夫か…？」
と、俺は東条の手に触れてみた。

「！」
東条は震えていた…まるで天敵に襲われようとしている小動物のように…

「ご、ごめんなさい…必死におさえようとしているのだけれど……」
「怖いのか…？」
「……」
無理もない、戦場で常に生と死の狭間にいる俺とは違い東条はただの女の子だ、そんな子が目の前で銃を連射されて、命を狙われて…怖がらない方がおかしいに決まっている。
だけど、東条は
「だ、大丈夫だよ…ちょっと疲れただけ…すぐに落ち着くから…。」
と、平然としている俺に心配をかけさせないために必死に恐怖を隠そうとしていた…。

「東条…」

「あ、あれ……？…震えが…止まらない…ごめんなさい鉄君…もう少しだけ待って…。」

「もういい…」
恐怖を必死に隠そうとしている東条を俺はそっと抱きしめた…

「く、鉄君！？」
「東条…もう無理をするな…怖かったら怖いと言えばいい…俺に気遣うな…正直に自分の気持ちを吐け」
「……」
東条は少しの間黙っていた…

「……怖いよ…鉄君…」
東条は涙を浮かべながら言った…

「大丈夫だ…俺がいる」
「俺が東条を必ず守る…だからもう大丈夫だ…」
「鉄君……」
「お前が落ち着くまでこうしておいてやる…」
「……」
すると、東条の震えは次第におさまっていった…。

「ありがとう…鉄君、もう本当に大丈夫…」
「そうか…」
「その…本当に…ありがとう…」
東条は頬を赤らめて言った

「さて…まずはここから脱出しないとな」
「そもそもなんでこんな事になったの…？、警備ロボが誤作動なんて…今まで無かったのに…私たちが認識出来なかったのかな…」
「いやあれは認識する以前の問題だろう…誤作動を起こしたんではなく、恐らく警備ロボの認証プログラムが完全に書き換えられているんだろう…だから認証するもの全てをレベル８のテロリストと判断するようになっているんだろう」
「そんな…一体誰がそんな事を…」
「わからない…」
（外部から書き換えられたとしか考えられない…だがこの鳳凰学園の制御システムのセキュリティーは国家クラスのはずだ、それほどのセキュリティーを破れるハッカーは…もしや…）
「鉄君？どうしたの？」
「ああ…何でもない…」

「でも…私達これからどうすればいいんだろう…外部とも連絡とれないし…」
「まさか…朝までこのまま！？」
突然東条は赤くなった。
「いや…確かに朝になれば警備ロボのタイマーが切れて助かるが…警備ロボが追跡してきているからな…徐々にに追い詰められているんだろう、なんとか脱出しないと…ガトリングで撃たれて蜂の巣だな…」
「そんな……」
東条は心配そうな顔をした。

「大丈夫だ…俺が守ると言っただろう、安心しろなんとかする」
「うん……」

（俺一人なら学園のコンピューターを使ってプログラムを書き換えたり、ロボットを機能停止にさせる事が出来るんだが…今は東条がいるからそんな事をすれば俺の正体がバレてしまう…。出入り口は全てロックがかかっていて窓も開かないから飛び降りることも出来ない…。どうするか…）
（ん？まてよ…飛び降りる……。！）
俺はあるアイディアが浮かんだ

「東条ちょっとここにいといてくれ」
「えっ？どうしたの？」
「すぐに戻る」

少し離れた場所で俺は小型通信機を作動させた

「こちらマクベス…大佐応答してくれ」
＞……ベス…マ…ベス…マクベス聞こえるか？マクベス＜
「ああ聞こえている」
＞そうか君が定時連絡を入れないから心配したぞ＜
「すまない…少し困った事になってな…」
＞困った事？何かあったのか？＜
「詳細は後で報告する…大佐、セシルは今任務中か？」
セシル・ウィルクマン
赤毛のフランス人（女）で俺やバルトと同じSランクエージェントであり、戦場には出ないが主に脱出ルートの作成や、コンピューターのハックなどのバックアップを担当している。
＞大丈夫だ、今は任務についていない＜
「すまないが繋いでもらえるか？」
＞分かった……＜

ガーガービー
「セシル聞こえるか？」
＞聞こえているわよ、どうしたの？マクベス＜
「少し困った事になってな…お前の力を借りたい」
＞しょうがないわね…高いわよ？＜
「かまわない、引き受けてもらえるか？」
＞分かったわ、でも先に事情を説明して＜
「分かった…」

俺はセシルに今までの経緯を伝えた。
＞なるほどね…鳳凰学園のセキュリティーは私でも解除が難しいの、それが出来るとしたらかなりの腕前ね。＜
「やはりあの組織か…？」
＞心当たりがあるの？＜
「ああ一つだけな…だがまだ憶測の段階だ。」
＞ふ～ん、で、私は何をすればいいの？＜
「ドアのロックを解除して欲しい」
＞マクベス…忘れたの？私言ったでしょ、そこのセキュリティーは外部からの解除が難しいって、そりゃ出来ないことは無いけど…朝までかかるわよ＜
「別に全部のロックを解除とは言っていない、ただ一つのロックだけでいい。」
＞一つだけ？どこの？＜
「屋上だ、あそこのロックは確か他と比べてバージョンが古かった筈だ。」
＞ちょっと待って調べてみる……本当だわ…これなら３０分程で解除出来るわ、でも…屋上に行ってどうするつもり？＜
「それは……」
俺は自分のアイディアをセシルに話した。

＞無茶よ！そりゃ確かに物理的には可能かもしれないけど…危険だわ＜
「手段を選んでいる暇はない、他に方法も無いしな。」＞……
分かったわ、じゃあ解除出来たらまた連絡するわ。＜
「頼む…」

通信を終え、俺は東条の元へ戻った。
「何…してたの？」
「ちょっと調べものをな…、それより脱出する方法が分かった。」
「本当！？」
「ああ…今から屋上に向かうぞ。」
「屋上？どうして…？」
「ついてくれば分かる…行くぞ」
と、移動しようとした時
「！　鉄君待って！」
ふと東条に止められた…

「何だ？」
「腕…血が出てる…」
「ああ、ただのかすり傷だ…気にすることはない。」
「ちゃんと止血しないと…」
そう言って東条はハンカチを取り出した

「大丈夫だ…放っておけば自然に治る」
「ダメ、こんなに血が出てるのに…」
と、東条は俺の腕を巻き始めた。

「それに…私のせいで怪我させたから…」
「東条……」
「そういえば…前にもこんなに事あったよね…私が不良に絡まれて

て、鉄君が助けに来てくれたて…。」
「ああ…そんな事もあったな…。」
「何だか私、鉄君に迷惑かけてばっかりだね…。」
東条は少しだけ落ち込んだ顔をした。

「…そんな事はない、東条は俺を映研に誘ってくれただろう？多分東条がいなかったら俺は映研にも入らず、ずっと1人だっただろう……ありがとう…東条。」
「そ、そんな…私は…ただ…」東条は少しだけ赤くなった。

「できたよ。」
「すまない…感謝する」
「ハンカチ…返さなくていい…からね…」

「……」
その時、俺は初めて東条を助けた時と同じように痛いはずの腕に温かみを感じていた…。
（まただ…また…この感覚だ…。）
それだけではない、俺は東条を守ると決めた時もいつもの護衛任務とは違う気持ちになった、いつもの護衛任務では、別にクライアントが傷つこうがなにしようが関係なかった…、それにクライアントが死のうが生きようがなどどうでもよかった…。

でも、今回は違う
「少しも傷つけたくない」
「絶対に死なせない」
そう思っている、別にどこかの国の重要人物というわけではない、みんな同じただの
「人」の筈なのに…

（この感情は一体…）

前にも出て来た疑問だった、でも今は考えてる時間はない、とりあえず脱出してから俺は考える事にした…。

## マクベスは脱出する～第三編～（前書き）

前話よりも長めです、結構頑張って書いてるとこもあるので読んでみてください。

## マクベスは脱出する～第三編～

鳳凰学園４階…
恐ろしい程順調に来た、途中警備ロボに見つかる事を考えていたがそれもなく普通に４階まで来れ、あとは屋上行きの階段に向かうだけだった。
「妙だな…俺達は追跡されている筈なのに…」

そんな疑問が頭をよぎった。
その時
（ヴィーンヴィーンヴィーン）
と通信機のメロディーが鳴った

「東条、ちょっとすまない」
俺はそう言ってまた少し離れた場所で通信機のスイッチを入れた

＞聞こえる？マクベス＜
「ああ、聞こえている、解除出来たのか？」
＞うんそれは出来たけれど……＜
「どうした…？」
＞少し気になる事があるの、さっき鳳凰学園のセキュリティーにハックした時ちょっと警備ロボのセキュリティーも確認してみたの、そしたらそのハッカー、警備ロボの認識システム以外にもどこかハックしたみたい＜
「場所は分からなかったのか？」
＞ちょっと無理だったわ、でもハックしたことは確かだから気をつけて＜
「分かった…切るぞ」

と言って俺は通信機のスイッチを切った
「認識システム以外にも…か…、俺の気のせいだといいが…」
そして俺は東条の元へ戻った。
「東条、待たせたな。」
「何かあったの…？」
「いや、何でもない…早く行くぞ」
「？」
その後も警備ロボには出会わなかった、まるで俺達を見失ったかのように…。
そして俺達は４階の廊下の突き当たりにある屋上へと向かうドアの前まで来た。
「ここまで来たけど…ここも閉まってると思うよ…」
「大丈夫だ…まかせろ」
そう言って俺は小さな金具みたいなのを取り出しカギをいじくり始めた、もちろんこんなに事をしなくてもドアは開いているが、それでは何故開いていたのか、と東条に疑問を持たせてしまうからである。
「開いた…」
少し経ってから俺は言った。
「すごい…鉄君…」
と、東条は驚いていた。
「これぐらい朝飯前だ」
とか言う嘘（ピッキングは本当に出来るが）をいいながら俺はドアノブに手をかけた…。

その時だった…

（ガラッ）

と、後ろにある教室の中から大量の警備ロボが出て来た…。

そう、今まで警備ロボが襲ってこなかったのは俺達を見失ったわけではない…単に俺達を待ち伏せいただけだったのだ…。

「！」

「！」

俺達が呆気にとられている内に警備ロボ達は。「ターゲット確認、ロックオン」

と、俺達にそのガトリングガン向けた。

俺はとっさに。

「東条！逃げろ！」

と言って東条の手を掴み、ドアの中を押し入れた。

「鉄君！」

「先に行け！後で俺も追いつく！」

「でも…鉄君が…！」

「いいから先に行け！死にたいのか！」

「……」

「早く！」

そう言うと東条は屋上へ向かった。

俺も一緒に行こうかと考えたが、それでは警備ロボの追撃を受けてしまうと思い、俺は残り警備ロボを足止めする事を選んだ。

すると警備ロボは。

「ターゲット一名逃走、追跡ヨリモノコリノ一名ノ処理ヲ優先シマス」

と、俺に全ての銃口を突きつけた。
「さて、どうするか…」（1対7、しかもこっちは生身でほぼ丸腰…この状況を抜け出すには…）
「ターゲットロックオン」（こうするしかない！）
俺は真正面にいた警備ロボに向かって走った。
「攻撃カイシ」
ダダダダダダダッ
と、警備ロボが一斉に撃ち始めると同時に俺は真正面の警備ロボットの懐に入りロボの腕を掴んだ。
すると
ガガガガガガガガッ
弾は俺には当たらず真正面の警備ロボに当たっていた、俺は真正面にいた警備ロボを盾にしたのだ。
警備ロボは機械である分精密な射撃が出来ない、ターゲットを一度ロックオンするとそこを目掛けて連射し、ターゲットが移動するとそれに追尾して弾道を合わせるようにプログラムされているので、たとえターゲットとの間に味方がいたとしても構わず連射する、それを上手く利用すれば他の警備ロボからのガトリング砲を一体のロボの行動を防ぐ事で全て防ぐ事ができる。（と言っても警備ロボは装甲が堅いのでガトリング砲ではびくともしないが…）
それに真正面のロボからの射撃は腕を掴み防いでいるので事実上、安全地帯となった。
しかし
「敵ノ接近ヲ確認、武器ヲヘンコウシマス」と、言って真正面ロボ

はいきなり腕のガトリングガンをチェーンソーに変えだした、
チュィーーーーン
と、チェーンソーの歯が回転しだし俺に襲いかかった。
「くっ……！」
俺は何とか腕（歯じゃない部分）を掴み、チェーンソーの歯が当たるのをギリギリ防いでいた。
だが……。
時間が経つにつれ、ロボのチェーンソーに圧されてきた。
「マズいな…このままじゃチェーンソーでミンチがオチだな…。」
だがその時。
ダダダダダダダ……。
と、他の警備ロボのガトリングガンが弾切れになり銃撃がやんだ。
（今だ！）
ドカッ！
俺は真正面ロボを片足で思いっきり蹴り飛ばした。
ガッシャーン！
真正面ロボは吹っ飛んで後ろの警備ロボ2、3体に激突し、倒れた。
そして俺は真正面ロボに向かって飛び上がり、空中からのかかと落としをロボの顔面にお見舞いした。
「はあああっ！」
グシャ！パリーン！

真正面ロボの顔の液晶部分が粉々に砕け散った。
「システムエラーシステムエラー、メインコンピューターニ以上ハッセイ、ターゲット補足不可ターゲット補足不可ターゲッ…ト……
……」

そう言い終えると真正面ロボは動かなくなった、警備ロボットのメインコンピューターは人間性を高めるために人間と同じ顔に設置されている、また顔面は視界を確保するために他の装甲とは違い強化液晶構造となっているので若干強度が弱くなっているので、俺はそこを破壊するとともに顔内のメインコンピューターを破壊した。

「まだまだっ！」
と、俺は倒れている警備ロボットに迫り

ダンッ！ダンッ！ダンッ！ダンッ！ダンッ！ダンッ！
と持っていたベレッタ（改造済み）で顔面に向かって超至近距離から連射した。

パリーン！

とロボの液晶部分は割れ機能停止となった。

すると背後から

チュィーーーーン！
と、警備ロボがチェーンソーで斬りかかってきた。
「甘いんだよッ！」

俺はそれを横にかわし、振り向きさまに回し蹴りを顔面にお見舞いした

ガッシャーーン！
機能停止はしなかったが液晶部分は粉々になった。

「まだまだッ！」
ダンッ！ダンッ！ダンッ！ダンッ！

俺はベレッタの残りの弾数を壊れた液晶部分に撃った。
すると
「メインコンピューター修理不可ターゲッ…ト……不可ター……補……」
と機能停止になった

こうして俺は十数秒の間に7体のうち3体の警備ロボットを破壊した。

すると、突然残りの警備ロボの液晶の色が変化した。

「テロリストトノ力量ノ差ヲ確認、警戒レベルヲ最高トシ、タダイマカラ徹底消去モードニウツリマス」
「徹底消去モードか…マズいな…」
徹底消去モードとは警備ロボットの全ての制限（リミッター）を解除し、容赦なく相手を消すモードの事で、最悪ロケットランチャーを出すこともあるという警備ロボット最強のモードである。

（俺がこのまま屋上に向かえば、警備ロボットは俺を追跡し二人とも屋上で殺される…かといって下手に攻撃するとロケットランチャーで学校ごと壊されてしまう…そうなったらどっちみちあの世行き

だな…）
「くそっ！万事休すか…」
俺が思考をひねらせていると。
パリーン！！
と突然窓ガラスが割れ男が一人入って来た…
「バルト！？」
入って来た男はバルトだった。
「悪ぃマクベス、遅れちまった。」
「お前…どうしてここに？」
「セシルだよ、アイツが大佐に連絡をして俺を派遣してもらったんだ」
「セシルがか…？」
「ああ、そうだよそして俺が援軍としてここまで来て、校外から突入したっていうわけだ。」
「そうか…すまないな…バルト」
「よせよ水臭い、戦友（ダチ）だろ？俺ら」
「ああ…そうだったな。」
そう言って俺たちは拳をコンと合わせた
すると警備ロボットは
「ターゲットノ追加ヲ確認、警戒レベル最高警戒レベル最高」
と言って、液晶のランプを赤に変えた。

「さてと…マクベス、状況を教えてくれ。」
「敵は警備ロボット４体、どれも警戒レベル最高の徹底消去モードに入っている。」
「マジかよ…何でこんな事になったんだか、で、お前のお望みは何だ？」
「ロケットランチャーを使わせずに撃破だが…出来るか？」
「まかせときなマクベス、お前は早く彼女の元に行ってやれ。」
「……頼んだぞ…バルト」
俺がそう言うとバルトは親指を立てて答えた。
そして俺は屋上へと向かった。

「ターゲットノ逃走ヲ確認、追跡シマス」
と、警備ロボットが追跡しようとしたその時。
「悪ぃな、ここを通すわけにゃいかないんだ」

ドカーンッ！！

と、バルトの超至近距離からのショットガンが命中し、警備ロボの頭が吹っ飛んだ。

鳳凰学園　屋上
「東条ッ！」
「あっ、鉄君！」
「すまない…遅くなった、大丈夫だったか？」「うん、私は大丈夫、でも…鉄君は大丈夫なの？怪我…してない？」
「大丈夫だ…すまないな心配かけて。」
「よかった…鉄君が無事ならそれでいいよ」

と言って東条は笑った。

「早く脱出するか。」
「どうやって？」
「こうする。」

と俺は東条の背中と足を持ってお姫様抱っこをした。

「きゃっ！ちょっ…ちょっと鉄君！？」
「今からこのまま下に飛び降りる」
「え！？だってここ４階よ！」
「大丈夫だ、下は木が覆い茂ってるから木をクッションにすればいい、東条は俺に掴まっとけば衝撃は来ない。」
「そんな…無茶よ！私はともかく鉄君が…」
確かにそうだった、４解から飛び降りるのだから足への衝撃はかなりのものとなるし、着地を失敗すれば東条だって無事ではすまないだが……

「じゃあ他にどんな方法があるというんだ？」
「それは…無いけど…でも…」
「俺のことなら心配するな…俺を信じてくれ。」東条はしばらく考えた後。
「鉄君……、わかりました、あなたを信じます。」
と東条は俺にしがみついた。

「いくぞ…」
俺はフェンスを越え屋上から飛び降りた。
「ーーーッ！」
「顔を伏せろ東条！」
そしてそのまま木の茂みへと突っ込んだ。

バキバキバキバキッ！
次々に枝は折れていき、地面が近づいてきた。
そして…
ズドン！！
と俺達は地面に着地した
ミシッ…
「痛ッ……大丈夫か？東条」
「うん…私は大丈夫…」
「そうか…よかった…」
「鉄君は？足…大丈夫？」
「ああ、問題ない。」
「そっか…、で、…その…鉄君…」
「ん？どうした？」
「その…あの…下ろしてもらえますか…」
と、東条は顔を赤くして言った

「これからどうしよう…とりあえず先生に連絡を…」
「いや、それは俺がしておくから東条は早く家に帰った方がいい。」
「え…でも…」
「もう遅いだろ？送っていくからこのことは任せろ」
「いいの…？」
「ああ、あと家に帰ってもこの事は絶対に親には言うなよ」
「えっ…？どうして？」
「絶対安全といわれた鳳凰学園の警備ロボが暴走したんだ、学園は間違いなくこの事実をもみ消しにくるだろう、だから下手に真実を

公にしようとすると、口封じのため最悪退学だろうな…」
「そんな……」
東条は少しだけ不安な顔をした。
「大丈夫だ…その件については俺が先生に話をつけておくから。」
「うん…」
そして俺達は学園を脱出し東条を家まで送っていった。

東条宅前

「今日はありがとう鉄君」
「学園の事は俺に任せて、今日はゆっくり休め」
「うん……」
「？」
東条は何かを言いたげな感じだった。
が…

「それじゃあまた明日、お休み鉄君」
と言って家へと入っていった。

俺は少し気になったが、何も言わなかった。
そして俺はこの事件の報告のため家へと戻った…

とある建物の内部

「こちら００１こちら００１、ーーー様応答して下さい応答して下さい。」＞聞こえているぞ、何のようだ＜

「例の鳳凰学園計画の第一段階が終了しました」
＞そうか…で、結果はどうだ＜
「ーーー様の言うとおりやはり鳳凰学園にはマクベスが存在します」
＞やはりな我が輩の睨みどおりだったか…で、警備ロボットはコントロール出来たのか＜
「コントロールは出来ましたが……申し訳ございません警備ロボットは全てマクベスらに破壊されてしまいました」
＞そうか…まあよいコンピューターをコントロールする事が我が輩の目的だったからな＜
「では引き続き第二段階に入ります。」
＞任せたぞ００１＜
「了解しました」
そういうと通信は切れた
「クックックッ、これで貴様にこの我が輩が受けた屈辱を復讐する事ができるぞ！」

「マクベス！！！」

「ハーッ！ハッ！ハッ！ハッ！ハッ！」
その男の笑い声は響きわたった…。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0434f/

マクベス

2011年1月13日03時30分発行